

『平家物語』における乳母子の考察

山崎真由美

一、はじめに

『平家物語』において「木曾最期」は有名な章段の一つといえる。本論文では、木曾義仲と今井四郎兼平という主従関係の中でも、従者兼平の「乳母子」という立場に着目し、主君義仲に対する乳母子兼平の存在意義と『平家物語』における乳母子兼平の位置づけについて検討した。

乳母子について論ずるにあたり、先に、乳母子の制度について確認しておく^{*1}。乳母子とは、古代・中世における擬制的血縁関係の一つである。母親に代わり貴人の子を養育する女性を乳母と言い、乳母の子供を乳母子と言う。養君と乳母子は格別に親しい関係になることが多く、主従関係としても特に相互に信頼し合える相手であった。武家社会の場合、乳母子は親密な側近として終身まで養君と行動を共にしていたようである^{*2}。

さて、乳母子に関する先行研究の多くは、乳母子の存在意義の重要性に注目して述べられている^{*3}。貴族社会と武家社会の乳母子の同一視には注意を払いたい^{*4}が、乳母子は養君との結びつきが強く、重要な役割を担い、養君に大きな影響を与える存在であったことについては貴族社会も武家社会も同様と言えると思う。

なお、本論文において『平家物語』の考察は、主に覚一本を用い、覚一本の本文は『新編日本古典文学全集』を用いた。それ以外の諸本を参考にすることは論文中で明記した。

二、『平家物語』に登場する乳兄弟

本論文の骨子とする義仲と兼平の乳兄弟関係を考察するために、まず、『平家物語』に登場する乳兄弟について検討する。

覚一本『平家物語』には六例の乳兄弟が登場するが、男性の乳兄弟とは乳兄弟の在り方が異なる女性の乳兄弟の例を除いて、四例の乳兄弟を考察した。その結果、『平家物語』に登場する乳母子は、主君に対して忠実な態度を見せる乳母子〈忠実な乳母子〉と、主君を見捨て、裏切る態度を見せる乳母子〈裏切る乳母子〉の二種類に分類出来ることが確認出来た。各乳母子の特徴を挙げると、以下の一覧のようになる。

〈忠実な乳母子〉

- ・飛騨三郎左衛門景経（主君：平宗盛）

… ふがない主君宗盛の為に自ら危険な場所に飛び込み、命を落とした。

- ・伊賀平内左衛門家長（主君：平知盛）

… 「一所の契り」を果たすために主君知盛と共に自害を果たした。

〈裏切る乳母子〉

- ・六条の佐の大夫宗信（主君：以仁王）

… 首のない死人が主君の以仁王であると認識した後も、主君を見捨て自分だけ生き延びた。

・後藤兵衛盛長（主君：平重衡）

…主従二騎になっていたにも関わらず、主君を見捨てて必死に逃げた。

以上の四例のうち、忠実な乳母子は、主君の側で主君の為に行動していた。また、家長の主君である知盛は、最期を遂げる意志を固めた際に乳母子家長を呼び寄せている。このことより、乳母子にとって主君は何よりも大切な存在であると同時に、主君にとって乳母子も特別な存在であることが確認出来る。一方、裏切る乳母子である宗信と盛長は、自らの臆病心が忠誠心を上回ったが故に、主君を見捨てる点が共通していた。宗信と盛長のような裏切る乳母子は、非難の対象となっている^{*5}。主君にとって特別な従者であり、主君のすぐ側で仕える乳母子という立場が、裏切るという行為に対する非難の度合いを強めているのである。乳母子は主君に忠実であることが理想的であったといえる。

また、『平家物語』において、乳兄弟の関係は特に、主君の最期の場面で際立って描かれる。これは、乳兄弟が「一所の契り」を結んでいるためである。「一所の契り」とは、乳兄弟が一所での死を契ることである^{*6}。『平家物語』作者は、意図的に乳兄弟の最期の場面（特に主君が最期を迎える場面）で乳母子の存在を強調し、「一所の契り」を遂行する過程を描いているともいえる。

三、『平家物語』における義仲と兼平

では、『平家物語』に登場する四例の男性乳兄弟と比較し、義仲と兼平という乳兄弟関係はどのようなものであるのか。

まず、義仲と兼平の乳兄弟関係を双方から検討した結果、義仲と兼平は大変強い信頼関係で結ばれていることが、兼平が義仲への進言を許されている点や、戦上手な義仲の戦の最前線を任される点などから確認出来た。また、二人の人物像を見ても、厚い情に任せて動く義仲に対し、冷静に物事を見極めて判断をする兼平は、対照的であり、バランスのとれた主従関係といえる事が確認出来た。

次に、主君義仲と強い信頼関係で結ばれていた乳母子兼平は、義仲にとってどのような存在であるのか。義仲に対する兼平の発言・行動・心理描写に留意しながら覚一本「木曾最期」における乳母子兼平の存在意義について検証を行う。乳母子兼平の存在意義を検証する側面として、第一に主君義仲を最優先に行動する点、第二に主君義仲に死の迎え方を説得出来る点、第三に兼平自身が武勇に優れている点が挙げられる。ここでは、第二の主君に死の迎え方を説得出来る側面を詳しく見ていきたい。以下に、「木曾最期」において兼平が義仲に自害を説得する一部分を引用する。

①今井四郎馬よりとびおり、主の馬の口にとりついて申しけるは、「弓矢とりは年来日
来いかなる高名候へども、最後の時不覚しつれば、ながき疵にて候なり。御身はつかれ
させ給ひて候。つづく勢は候はず。敵におしへだてられ、いふかひなき人の郎等にくみ
おとされさせ給ひて、うたれさせ給ひなば、『さばかり日本国にきこえさせ給ひつる木
曾殿をば、それがしが郎等のうち奉つたる』など申さん事こそ②口惜しう候へ。③た

「だあの松原へいらせ給へ」と申しけれ

ここでの兼平は、主君義仲を名誉の自害へ導こうと、必死に説得している。このように、乳母子が主君に対して自害を勧める用例は、『平治物語』の「六波羅合戦の事」でも確認出来る。該当部分を以下に引用する。

①鎌田、馬より飛び下り、轡に取り付き、「存ずるところありて申し候ふものを。御当家は、弓箭取りては神にも通じたまへり。『やうこそあるらめ』と天下の人申し合ひて候ふに、平家の目の前に、御屍を留めて、馬の蹄に当てさせたまはん事、②口惜しかるべし。全く、御命を惜しむためにはあらず。敵は幾万騎候ふとも、駆け場よき合戦なれば、打ち払ひて、③太原、静原の山の中へ馳せ入りても、御自害候ふべし。もし、また、延び得ぬべくは、北陸道に懸かりて、東国へ下らせたまひなば、東八箇国に、誰か御家人ならぬ人候ふ。世を取らんとする大将、左右なく御命を捨てられん事、後代の譏りあるべし」と申せども

「六波羅合戦の事」において正清が主君義朝に自害を勧める様子は「木曾最期」における兼平と酷似している。それぞれ、共通する箇所を傍線を付した。まず傍線部①は、乳母子が自分の馬から飛び下り、主君の轡に取り付く様子が共通している。傍線部①のように主君の轡に取り付いて物申す様子は、主君を説得しようとする気持ちの強さを表す。主君の動きを止め、乳母子の話に集中させることで、乳母子も主君に向かって真剣に話をしている様子が窺える。次に傍線部②は、討死する事は口惜しいと述べる点が共通する。「口惜し」とは、自分ではない対象に関して期待や希望が崩れ去るのを惜しむ気持ちで、悔しく耐えられないという意を表す⁷。乳母子は、主君が討死することをもったいなく残念な事であると考えていたのである。最後に、傍線部③の共通点は、具体的な場所を示し、主君に自害を勧める点である。乳母子が主君に具体的に自害を勧めるという行為から、主君の名誉の死に対する乳母子の思いは、主君自身の死に対する思いよりも格別に強いものであったと考えられる。乳母子の主君に対する強い思いが、渾身の説得へ繋がったのである。

以上のように、覚一本「木曾最期」における乳母子兼平の存在意義に関する検証を行った結果、兼平は義仲の弱点を支え、武将として輝かせることが出来る唯一無二の存在である事を確認出来た。乳兄弟関係は相互の人物像の形成に大きな影響を与えている。また、乳母子兼平は主君義仲との緊密な乳兄弟関係と、類を見ない忠誠心の強さ、自身の剛勇さから、理想的な乳母子として描かれていることを確認出来た。

では、覚一本において際立って素晴らしい乳母子として描かれる兼平はどのように享受されているのか。享受の中でも謡曲「兼平」⁸を中心に考察を行い、『平家物語』との共通点や相違点から、兼平の享受と評価について検討したところ、謡曲「兼平」において、死してなお義仲の弔いを一番に願った兼平は、『平家物語』で描かれる忠誠心の強い兼平像のイメージが膨らんだことから作り出された兼平像といえることを確認出来た。『平家物語』で描かれる兼平像は、忠誠心が強い理想的な乳母子として読者に印象付けられ、特別な存在として美化されながら享受されている⁹といえるのである。

四、終わりに

従者・乳母子という立場は、物語の中では脇役にあたり、『平家物語』において兼平は義仲の脇役に過ぎない。しかし、乳母子は、「一所での死」を契るほど、主君にとって特別な存在であった。乳母子は主君に大きな影響を与える重要な存在であり、乳兄弟関係は相互の人物像の形成に大きな影響を与えているといえる。特に乳母子兼平は、主君義仲との緊密な乳兄弟関係と、類を見ない忠誠心の強さ、自身の剛勇さから、理想的な乳母子像として享受されている。『平家物語』に描かれる兼平の人物像が美化され、特徴的な人物として語り継がれるほど、乳母子兼平は『平家物語』においても特別な人物として捉えられているのである。従って、義仲の乳母子兼平は、『平家物語』に登場する人物の中でも、注目に値する、重要な人物であるといえる。

- ¹ *乳母子の制度については、秋山喜代子氏「乳父について」（『史学雑誌』九九一七、一九九〇年七月）、吉海直人氏「乳母の基礎的研究」（『国文学研究資料館紀要』一二、一九八六年三月）、同氏「平安朝における乳母子の諸相」（『國學院雑誌』九九一二、一九九五年二月）、『国史大事典』、『平家物語を知る事典』を主な参考にした。
- ²* 武家社会の乳母子については、市古貞次氏『平家物語研究事典』を参考にした。
- ³ *吉海直人氏「平安朝における乳母子の諸相」（前掲*1）、西本寮子氏「秘密保持の構図—『今とりかへばや』の乳母と乳母子たち—」（『広島女子大学文学部紀要』二四、一九八九年一月）、今野鈴代氏「乳母子のこと 惟光のこと」（『鶴見日本文学』一、一九九七年三月）などの論文に詳しい。
- ⁴ *貴族社会と武家社会の乳母子の同一視には注意を払うべきという見解は、吉海直人氏や上田公幸氏なども挙げられている。平安中期の乳母が養君の邸に出仕しているのに対し、平安末期以降の乳母は自分の家で養君を養育する。乳母と養君の関わり方が異なるように、乳母子と養君の関わり方も異なると考えられる。よって、貴族社会と武家社会の乳兄弟関係の同一視は避けたいのである。養君の養育形態と変化に関しては、秋山喜代子氏「乳父について」（前掲*1）に詳しい。
- ⁵ *ただし、乳兄弟は一所の契りを結んでいることより、主君を置いて先に命を落とす乳母子に非難を向ける諸本（『平家物語抄』等）もある。
- ⁶ *本論文では乳兄弟が一所での死を契ることを「一所の契り」と呼ぶ。『平家物語』の乳兄弟が一所での死を契ることに関しては、高木信氏の論文に詳しい。
- ⁷* 語釈は『角川古語大辞典』と『日本国語大事典』を参考にした。
- ⁸ *謡曲「兼平」…作者未詳。室町中期成立の修羅能であり、江戸時代を通じ、現代に至るまで演じられている。（岩城賢太郎氏「『平家物語』から謡曲、そして古浄瑠璃へ—「木曾最期」を語った古浄瑠璃の様相」（『筑波大学平家部会論集』一二、九五～一一二頁、二〇〇七年三月）、『日本古典文学大辞典』、『平家物語研究事典』を参考。）なお、謡曲「兼平」は『謡曲百番』（『新日本古典文学大系』）の本文を用いた。
- ⁹ *謡曲「兼平」に限らず、琵琶法師の語りである平曲においても、「木曾最期」は英雄の待機やその劇的な行動、奮戦ぶりなどを語る場合に用いる曲節を主調として語られる。（梶原正昭氏「いくさ物語の形象とパターン」（『平家物語 下』、『新日本古典文学大系』、一九九三年）を参考にした。）また、覚一本や謡曲「兼平」で強調される兼平の自害は、絵巻における「木曾最期」でも取り上げて描かれる。ここからも、「木曾最期」において兼平の最期は特に印象的なものとして享受されていると考えられる。